カシミヤ人の手工

ミヤ土民の服裝は、纏頭の女子服に酷似して少しく寛に、且つ短きものを着し下方に一の横襞ありて、男女同樣甚だ見苦しく、女子は白布の頭巾鼠色になれるを被り男子は椀形の帽を冠す。

予は未だ達磨の眞相如何を知らずと雖も、一般に描かるゝ樣を以てすれば、實にカシミヤ山中の土人は擧て活達磨たらずんばあらざるなり。予初めて彼等を觀るや、頗る奇異の念に堪へず、心中覺えず活達磨と呼べり。其の狀貌と云ひ、服裝と云ひ、而も腹部に一段の突起するものありと云ひ、縱横熟視すれば熟視する程、正に活達磨たらずんばあらず。獨り奈何せん達磨は偉大なる人物たるに因りて、脫俗清爽、威儀堂々たる裡、慈眼溫容を備へたるに反し、此れは無智無識の一蠻族なるが故に、粗野鄙陋固より語るに足らざるを。されど大體其形に就て云へば正に活達磨たるを失はず。況んや彼等習慣の携帶爐を股間に挾みて路傍に蹲踞する狀の畫樣に酷似せるに於てをや。

氣候の關係は、大體印度をして裁縫の術に長せしめず。之に倣ひしカシミヤ人種は蠻族なるが故に爭でか物を進歩發達せしめんや。其の印度より寒冷の故に